Japaneseman In NY （ニューヨーク生活）

(Photo: B'way & W 72nd St.)

≪ニューヨークの夏≫

アッパー・ウエストの閑静な通りに立ち並ぶアパート郡の一室。日本の感覚で言えば、やや広めの三畳部屋に上下開閉式の窓がひとつ。この部屋で 4 年間を過ごした。備え付けのシンクと、ミニ冷蔵庫にガス・コンロがひとつ。それにベッド、テレビ、古タンス、ビデオデッキ、大量の CD やレコードに雑誌、そして、大切なウッドベースと共に暮らしていた。歩くスペースは大人ひとりが何とか寝転べる程度。当然ベッドが椅子替わりだが、座りながらあらゆるものに手が届くという点で、便利っていえば便利な部屋だった。

冬はスチームが入っている為、部屋の中はTシャツ一枚でも大丈夫だが、夏は凄まじかった。酷い時には、扇風機から片時も離れられないほど室内は火照り、共同のシャワー室で水シャワーを浴びても、水を止めた途端に汗に変わるほど。

そんな暮らしの中でも、一年目の夏は、近所のウールワースで見つけたミニ扇風機で何とか凌いだが、2 年目の夏には 40 度なんて暑さの日もあり、夜毎体験するサウナ室のような状況に閉口し、ナケナシの金を集めて遂にクーラー購入を決意した。早速、陽気なスパニッシュの店員が営む近所の電気屋で、280 ドル程の一番安いものを見つけ迷わず購入。大きな箱に梱包された愛しのクーラーは結構な重さだったが、7 ブロックほどの距離を休み休み担いで帰った。汗はダラダラ、おまけに部屋は 4 階でエレベーターなんて洒落た乗り物などなく、階段も担いで上った。

何とか部屋に辿りつくも、休む間もなく涼しい風を浴びたい一心でダンボールを剥ぎ取る。そして、姿を現した純白のゴツイ奴。この感動の対面は、汗が涙に変わるほどだった。ジャズでも聴きながらと、お気に入りだったポール・チェンバースの『ベース・オン・トップ』を聴きながら一瞬の安堵感を味わうと、直ぐに説明書を殴り読みしセッティングに取り掛かった。窓に取り付け、コンセントを接続。後はスイッチを入れるだけのこの瞬間。それまでの嫌な汗も爽やかに感じるほど心地良い緊張が走った。

「カチッ」という音と共に、白いボディから振動が伝わり、一瞬の間を置くと涼しい風が吹きつけた。この瞬間をどれだけ待ち望んだことか。直ぐにスイッチを「High」にひねると、さらに冷んやりと幸せの絶頂を感じながら、ベッドに仰向けに寝転んだ…。

数えて 5 秒程だろうか。「グゥーンッ」という嫌な音と共に涼しい風が途絶えた。「あれっ？」とベットから身を起こすと、隣部屋の住人がドアを開け階段を駆け下りる気配。暫くして再度スイッチをオンにすると、再び涼しい風がそよいできた。「不良品か？」なんて不安がよぎりながらも、またベットに横になったその瞬間。再び「グゥーンッ」と情けない音と共に涼しい風が途絶えた。そして、再び隣部屋の住人がドアを開け階下に…。さすがに嫌な予感がし、ドアを開けて階下を覗くと、隣部屋の住人が棒を使って必死にブレーカーを上げる姿…。そう、停電。

結果的には、自分がクーラーをつけることで、隣部屋との共同電圧が限度を超えてしまうという悲しい結末に…。その後、全ての電化製品のコンセントを外し、クーラーだけで試してもやはりダメ！　僅か数秒間涼風を浴びただけでクーラーを手放す羽目に。勿論、陽気なスパニッシュながら返品など不可。数日後に隣部屋の住人の知人に 200 ドルで買い取ってもらたった…。

「北川さん、あの時は本当にすいませんでした」。　隣部屋の住人＝北川さんは、現在も NY で活躍するジャズ・ベーシストです。